

学んだよ! 作ったよ! 楽しかった夏休み

コロナ感染が拡大した第7波の中でも元気に夏を過ごした鎌田の子どもたちのひとこまでず



かわいい七夕人形を
がんばって作ったよ!



8月4日、鎌田地区公民館では今年も「松本の七夕まつり」が行われました。小学生や親子連れなど32人が参加しました。最初に絵本の読み聞かせがあり、ウクライナの心温

まる民話『てぶくろ』、空襲にあった女の子の『ちいちゃんのかげおくり』など、平和をテーマとしたお話を皆が熱心に聞きました。松本の七夕行事を描いた『たなばたまつり』の後

大切に伝えていきたい ☆松本の伝統行事☆



鎌田地区
令和4年9月1日現在
総人口 19,936人
(前年比 +201人)
世帯数 9,432戸
発行者 鎌田地区公民館
公民館報編集委員会



8月10日、子どもたちが陶芸を体験する教室を鎌田地区公民館の主催で初めて開催しました。参加した小中学生18人がお皿やマグカップなど思いの作品を、公民館で活動する5つの陶芸サークルの皆さんのアドバイスをいただきながら作りました。古畑倅くん(中学1年)は「楽しい作業だった。出来上がったら家で使いた

子どもたちが陶芸に挑戦!

い」と感想を話してくれました。作品は公民館の陶芸窯で焼いて完成させ、10月下旬に鎌田地区公民館で開催する「美術工芸作品展」に展示します。



ろくろを回して茶わんの厚みを調整。むずかしいなあ!

は、松本の「ぼんぼん」の歌をみんなで歌いました。その後、紙びな形式の七夕人形を地域の大人たちに教わりながら作りました。子どもたちは「平和について考えることができた」「人形作りは楽しかった」などと元気に感想を話し、七夕まんじゅうと人形を嬉し

そうに持ち帰りました。月遅れで行われる七夕のなかでも、軒先に七夕人形を飾る風習は全国的にも珍しく、お盆前の夕刻には、男の子は「青山様」を担ぎ、

女の子は「ぼんぼん」を歌って町内を巡ります。城下町松本に長く続いてきたこの行事は、いつまでも大切に伝えていきたい夏の風物詩です。



両島町会は青山様・ぼんぼんを3年ぶりに計画したが、雷注意報がでて中止となり、6年生は公民館前で神輿を担いで思い出づくり



今年も夏休みの間、公民館を小中高校生に学習室として開放。写真は学習支援ボランティアの助言を受けながら勉強する小学生

キラリ☆ かまだびと 4

昨年発行の第200号から始まった本シリーズでは、熱心に地域の活動に取り組む人や学校の部活動に打ち込む若者ら、キラリと輝く“かまだびと”を随時掲載しており、第4回の今号では6人を紹介します。



子どもたちの成長を見ることが楽しみ

横林美祐さん(25歳 鎌田町会)

小学2年生でボーイスカウトに入団。集団行動を通じて協調性や規律を学んだ。スカウトの模範となる富士章を取得し、現在は松本第4団の指導者として活動。人と関わる機会が減っている今だからこそ、子どもたちのふれあいを大切にしている。

ボランティアでOMF音楽祭を支える

村松昭雄さん(81歳 井川城中区町会)

セイジ・オザワ松本フェスティバルを支える200人のボランティア組織「OMFコンチェルト」の代表。「気持ちよく演奏を楽しむお客さまの姿に裏方の苦勞が報われる」と話す。30周年となる節目の音楽祭を無事に終えて代表として感慨深い。



社会の犯罪防止活動に保護司として奉仕

山元秀泰さん(69歳 石芝町会)

犯罪や非行をした人の立ち直りを支える更生保護ボランティアである保護司を務めて30年。長野県保護司会連合会の会長として、悲しむ人が少なくなるよう犯罪や非行を未然に防ぎ、社会を明るくする運動にも力を注いでいる。



所属する山岳部でインターハイに出場

酒井隼さん(18歳 井川城中区町会)

県ヶ丘高校3年生。全国大会では、山を登る体力や技術の他に、天気図の描き方や救護知識などを競う項目もあり、3泊4日の競技を「過酷だったが、いい経験になった」と振り返る。今後も山登りは趣味として続けたいと考えている。



市内にラジオ体操の拠点を20カ所に広げたい

山本英明さん(71歳 笹部町会)

25年前、転勤を機に松本の美味しい空気と温かい人情に惹かれて移住。1級ラジオ体操指導士の資格があり、8月から鎌田地区公民館前で始まったラジオ体操を週2回指導している。交通安全協会鎌田支部長も務めている。



女性消防団員として地域に貢献したい

わげべ 分部真由美さん(46歳 中条南町会)

松本市消防団第5分団で唯一の女性団員。町会長をしていた父親の勧めで入団して今年で10年目。ラッパ隊にも所属している。報酬が改善され、女性でも不安なく活動ができるので、地域防災を担う一員として、やりがいを感じている。



雑感
この夏は毎年厳しさを増す猛暑に加えて、しぶとく変異を繰り返すコロナウイルスに悩まされた。収束への期待は何度もあつてなく覆され、マスクやアルコール消毒もすっかり常態化し、人と会うのにも理由を探してしまうこの頃、日常生活のみならず様々な影響を及ぼしている▼町会としても諸行事の中止や延期を余儀なくされてきた。例年当たり前のこととして続けてきた諸行事を中止しても何の不都合も無かったり、むしろ止めて喜ばれたものさえある。町会を運営する役員の苦勞の割にはさほどの意味は無かったのではないかとさえ思えてくる。環境も社会情勢も人々の考え方も大きく変化しているし、高齢化はもちろん、若い人の町会離れ、無関心も深刻だ▼地域の文化・伝統として伝えていくべきものと、時代に応じて工夫し変化させていくべきもの、あるいは取りやめるべきものなど、もろもろの町会行事の意味や実施方法を考え直すきっかけをコロナ禍が与えてくれたように思えてきた。ピンチはチャンスといふことだろうか。(小林陸和)